

名所史の基点

田尻嘉信

一

和歌の地名表現は、『古今集』を實質上の基点に後代への展開を示した。前代との相異は、從駕・赴帰任などによる歌人と地名との特定な関係が薄れたことにある。居ながらにして未見の地が詠まれ、歌詞としての視角から新たな表現効果がはかられた。貫之は仮名序に、その用法が「読人しらず」の歌群にはじまり、ことに恋歌・雑歌に特色をもつ点を指摘している。主に序・懸詞・縁語・譬喩など、修辭上の範圍にみられる傾向である。それは『万葉集』にも一部あったが、作風に理知を加えた好尚によって支えられた。地名はひろく歌人の共有となり、意図・技法に基づいて多角的に利用されたのである。

地名は歌詞に組みこまれることで普遍化した、それだけに本来の実景的要素は弱められた。地名は個々の景物との関連で記憶されたのである。地名を縁に、実景的なものの比重が増すのは、平安中期以降と違ってよく、かなりのものことである。

公任『諸国歌枕』・能因『能因歌枕』などが先駆となって、歌論上に認識が示されるのもその時期である。この「歌枕」が地名の術語で最初のものである。もっとも「歌枕」には、広狭二義が認められる。公任の佚書では狭義で、地名の意と解されるが、能因は広義で地名を含む作歌便覧の意、地名には「所名」(広本)が用いられた。歌合に長久二年五月一日庚申(一〇四二)、『祐子内親王名所歌合』の例があり、「名所」が初見される。狭義の歌枕への定着は、『童蒙抄』にみられる。次第に「名所」「所名」の語が一般化されたようである。

歌に詠みこまれる地名は、「名あるところ」として関心をあつめた。平安末期には、歌論書・歌合判に名所故実の論議が起り、精細の度を加えた。歌論書には、当然のように名所の記載が増し、不可欠の要素となったようである。やがて大部の『八雲御抄』には、巻五に名所部が置かれた。千五百有余の名所は和歌史的な集成であり、登極期を経た段階での一区切とみられる。中世以降は隠者・連歌師に承けつがれ、名所の蒐集、考証があいついだ。名所が歌の世界を象徴するも

一

のとして、敬意と情熱とが傾けられたのである。小稿では、この名所の発起といえる『古今集』について、実情を明らかにしてみたい。

二

『古今集』の地名表現を大別すると、叙景的なもの、叙情的なもの、の二面がある。前者には、次のような例がある。

題しらず

春霞たてるやいづこみよしのの吉野の山に雪は降りつつ(春上 3)
(詠人不知)

くらぶ山にてよめる

(春上 39)

梅の花にほふ春べはくらぶ山やみに越ゆれどしるくぞありける

仁和の中将の御息所の家に、歌合せむとしてしける時によめる

(春下 108)

花の散ることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすの声

音羽山をこえける時に、郭公の鳴くをききてよめる (夏 142)
(友則)

おとは山けさ越えくれば郭公こぞゑはるかに今ぞ鳴くなる

最初の「みよしのの吉野の山」は、同音を重ねて素朴な感じがいかにも「読人しらず」らしい。その地に住む作者の歌であろう。「読人しらず」には大和の名所が多く、地縁による表出とみられる。深山続きの吉野山(里・山)は、雪(317冬) (321同) (325332同) の連想が普通であった。また隠れ里(327冬) (950) (951) (雑下) (不知) としても詠まれている。同地の自然の条件によるもので、後述するように花との関連はまだごくわずかである。

貫之「くらぶの山」は山城、暗部・闇部の字を宛てる。「暗し」の懸詞的な連想が伴って、下の「やみ」に続く。「やみ」は勿論、梅香の隠れもないかぐわしさを引きたてている。「くらぶの山」には「暗し」(秋上 295) (敏行) (秋下) と「較ぶ」(590) (是則) と、二つの修辭技巧があり、後代もどちらかをとっている。景物は梅のほか、桜・郭公・紅葉があり、中では紅葉がもっとも多い。

次の後蔭は、詞書にある歌合の披講に疑問があるが、題詠の一首ではあろう。「春霞たつたの山」は、名所の一部「たつ」が懸詞となっている。「なき名のみたつたの山」(拾遺 561) (新古今 3133) (俊忠) ・「唐衣たつたの山」(後撰 383) (友則 29) (同 386) など、同工がすくなくない。『古今集』には、「たつた川」(629) (恋三) (有輔) にやはり同例がみえる。立田山と鶯との取りあわせは珍しく、この歌だけである。猶、仮名序に「立田川に流るる紅葉」の一節があり、『古今集』には立田川が七首(283 284 294 300 302 311 314) と多いが、『後撰集』以後は立田山の紅葉が中心となっている。友則「おとは山」は山城、東山の一峯である。早朝の山越えに、はじめ聞く郭公の鳴き声であった。「こぞゑはるかに」「今ぞ鳴くなる」に、思いがけないその初声への感慨がこもっている。都を後にする作者と都をさしてゆく郭公と、行き交う山中での一場面で、思いもひとしおというところである。東山よりは山科の音羽山が多く詠まれ、郭公を貫之(384) (離別) が詠んでいる。また秋風(864) (秋下) (貫之) も材とされている。音羽山の、「音」からの連想で、のちの歌も郭公・秋風を中心に聴覚的な配材が基本となっているようである。

以上のように四季歌では、実情に「読人しらず」の地縁歌と、記名歌の大和・山城の行旅を縁とする歌が大部である。雙方とも、名所は実在の地として一義的な意味をもち、耳目にふれる風物・風光を材に印象効果をはかられている。題詠の場合も、名所の選択は大和・山城の範囲である。さすがに名所が一義的な重味をもつとはいえないが、やはり景物を配して美的な空間の構成が試みられている。しかし、実情・題詠ともに「読人しらず」に較べると、記名歌では修辭上に巧を求める傾向が濃いようである。それを軸とする趣向への傾斜であり、表現の類型化につながる一面である。そのことが名所の普及を促す因となつてもいるが、歌のつくりだす「絵」として、その媒体はまだ意識されることがすくない。

四季歌ながら、次のような例もある。

をみなへし憂しとみつつぞゆきすぐる男山にし立てりと思へば

(秋上 227)

昨日といひけふと暮らしてあすか川流れてはやき月日なりけり

(冬 341)

前歌は実情で、後歌は題詠とみられる。今道は、「をみなへし」(女)と「男山」(男)による、常套の懸詞的な連想が軸である。眼前の秋色よりも、「憂し」とする心情の趣向化に作意がある。列樹は「あすか川」に明日の意を懸け、名所の縁で「流れてはやき」と続けている。淵瀬常なき明日香川を無常迅速の意で、流れの速さを印象づける役割としている。歳暮の歌らしい感慨を巧みに表現しているが、実在

の明日香川は稀薄である。両歌とも景よりは情に傾いて、名所の使用も表現上の便宜が優位となる趣である。

この傾向は、叙情歌の場合にいっそう顕著なものがある。

題しらず

音羽山音にききつつ逢坂の関のこなたに年をふるかな (恋一 473)

(元方)

津の国の難波おもはず山城の鳥羽にあひみむことをのみこそ

(恋五 825)

みちのくの安積の沼の花かつみかつみる人に恋ひやわたらむ

(恋四 694)

春日の祭にまかれりける時に、物見に出でたりける女のもと

に、家をたづねてつかはせりける

春日野の雪間をわけておひ出でくる草のはつかに見えしきみはも

(同 677)

やまとに待りける人につかはしける

越えぬ間は吉野の山のさくら花人づてにのみききわたるかな

(忠一 478)

題しらず

世の中にふりぬるものは津の国のながらの橋とわれとなりけり

(真二 588)

鏡山いざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

第一首は「音羽山」から同音反復で、「音」を導いている。「音羽山」はそのための枕詞である。「山科の音羽の山の音にだに」(恋三158)の例があり、また「ありとのみ音羽の山の郭公」(後撰158)「ありときく音羽の山の郭公」(同1262)なども、やはり「音」に因むものである。

この音羽山は洛東ではなく、逢坂山の西南に接して「逢坂の関」と地理的に関係が深い。「逢坂」に「逢ふ」の意が懸けられている。逢坂の関を越えれば近江(「逢ふ身」(離別369)となるが、「こなた」では逢うことのかなわぬ意となる。音羽山・逢坂の関、それに当然近江を計算にいれて、実在の地三ヶ所を懸詞的な連想で絡ませている。音羽山に作者自身を擬して、名所相互の位置関係を織りなしているのが巧みである。

第二首は、まず「わすらるる身を憂」と、「宇治橋」の「宇」に懸けている。ついで「宇治橋」の中絶する連想から、恋人との仲が「中絶えて」の意で下に続けている。絶えた橋では人も通えないように、二人の仲が待てども訪れない年月を過すことになったとの嘆きである。『蜻蛉日記』(安和元年九月(八九六))・『更級日記』(永承元年二月(一一〇四))の初瀬詣の条には、宇治橋の記載がない。前者は「車かきすゑて」渡ったらしく、後者には「宇治の渡り」が記述されている。橋が中絶していたのかもしれない。しかし、中絶の連想は不自然とみえたのか、のちの歌には全く例がない。それがまたこの歌の創意ともいえるが、実在を離れた名所の観念性が示された一首である。

次の「津の国の」の場合も、同様である。「難波」に「何は」、「鳥羽」に「とは」の意を懸けている。「津の国の」「山城の」は、ともに枕詞である。難波と鳥羽は、淀川・賀茂川によって結ばれる。隔ってはいるが、水運一路の両端に位置している。その点で、名所の選択は脈絡のあるものである。しかし、両所が恋仲の二人の所在にかかわっているわけではなく、やはり機知を専らとする名所の効用が主眼の歌である。

次の「安積の沼」は、上の句が「かつみ」を導く序、同音反復である。花かつみに、相手の面影を髣髴するの意もあろうか。恋・雑には遠国の名所がすくなくないが、これも一例である。「みちのく」への関心によるか(空題「評釈」は陸奥下向の。『万葉集』に安積山(387卷一六)があるが、平安以降はこれが典拠となり、安積沼がほとんどである。「かつみ」によるほか、所名から「あさし」「あさまし」など、同音の活かされる場合が多い。『和名抄』(卷一四)にこの景物「かつみ」はなく、「薦」がみえる。『古今六帖』(第六)には「こも」「花かつみ」と続き、後者に類歌(下句「かつみる人」の恋しきやなそ)を載せている。のち『俊頼髓脳』は歌語註に、ものの名も所によって変るとして、「かつみといへるはこもをいふなり」と記している。以後、諸註は「こも」説に従っているようである。猶、俊頼は陸奥には菖蒲がなく、かわりに五月五日「かつみ」を軒に葺くとも書いている。『無名抄』(五月か)に、下向した実方の故事としてそのことが載っている。

名所に景物を配して序を構成する例は、次の忠岑にやはりみられ

る。この場合は、連想の序である。詞書があり、春日祭に出向いた際の詠とわかる。春日祭は「春二月冬十一月上申日祭之」(延喜式卷一、神祇一・四時祭上)

とされるが、ここは明らかに春の祭である。初句から「草の」までが、下の「はつかに(見えし)」の序となっている。この序には、春日野の雪間に萌えはじめ若草の景が描かれる。春日祭の場所に因み、また若草には遅い感があるものの、時節への配慮もみえている。

それを受ける「はつかに」は、ほのかに見た相手の清らかさ・初々しさが象徴されているようである。詞書では相手の家もわかっているらしいが、「きみはも」とその面影を探す趣に仕立てて、思いの一端さを訴えている。「はも」の古調も、相乗効果をもたらしている。春日野と若菜(若草)との取りあわせははやく、「読人しらず」(1817春上)以来である。「春日野」と作る字面から、ふさわしい景物といえる。

『古今六帖』では、春日野は若菜(第四333古今素性357 334 335 337)のほか、夕立ち(第一510)霞(同916 627)春の野(第二310)野べ(同380)かざし(第四349)浅茅(第六360)すみれ(同376)と多岐に配されている。しかし、後流はやはり若菜で、忠岑のように雪を交えることも多く、叙景歌の仕立てが特色となっている。

次の貫之は、「吉野の山のさくら花」が、詞書「やまとに侍りける人」の譬喩となっている。雪の連想が常例の吉野山に「さくら花」は、当時として珍しい。ほかは四季歌に友則(60春上)がみられるだけである。仮名序には、「吉野の山の桜は、人麿が心には雲かとのみなむおぼえける」との一節がある。この人麿歌は未詳ながら、貫之は

みずから「吉野の山」と「さくら花」とを結びつけたのである。さながら後代を予見しているようである。

吉野山と桜との関連は、『拾遺集』(春中務37 同知41)『後拾遺集』(春上121)を経て、次の『金葉集』(春忠通30 同康48 同隆53 同堀河院中宮68)になっ

て定着をみたようである。この桜は、『万葉集』に「み吉野のみ金の嶽」(卷一三三 未詳)とある金峯山に将来された蔵王菩薩(袖中抄卷八「も」と)と、

関係が深い。蔵王権現信仰のはじまりは奈良から平安にかけてとみられるが、桜はその神木(和州巡覧記)とされ、金峯山寺の修験関係の人びとによって寄進されたのである。前代の宮滝付近を中心とした吉野山の名所は、平安以降金峯山寺周辺(大和志)に関心が移ったとみていい。

さて、続く「ながらの橋」は、淀川の支流長柄川にかけられた橋である。『初学抄』の喩来物の条に、「ふるき事には」として「ナガラノハシ」をあげ、この歌を引いている。古きことの譬えとして、名所が利用されているのである。

長柄の橋の造設は弘仁三年六月三日(八二二)、「遣使造撰津国長柄橋」(日本後紀 卷二二)とある。その後、仁寿三年一〇月一日(八五三)に、「撰津国奏言、長柄三国両河、頃年橋梁断絶、人馬不通」(文徳実録 卷五)の記事がみえる。断絶を詠んで興風に、次の歌がある。

こぼれてもあればたとへてなくさめむ長柄の橋もいまは聞えず

(興風集 149 / 同 51 二句「あはれ」とへて)

その状況がいつまで続いたか明らかでないが、仮名序「長柄の橋も造るなりと聞く人は」の一節があり、巻一九に伊勢の、

難波なる長柄の橋も造るなりいまはわが身を何にたとへむ(1051)との一首がみられる。橋は造りかえられたようである。興風・伊勢ともに、「読人しらず」に基づいて譬喩として扱っている。能因が、造った際の橋屑を珍重したとの逸話(袋草子)がある。しかし、やがて俊頼「名は残りけり」(千載1027)・道因「跡もなし」(同1029)と詠まれ、前記『初学抄』も所名の条には、「ながらのはし イマハナシ ハシバシラバカリヲヨム」と載せている。後鳥羽院は、その橋柱の切れ端を文台として和歌所に置かれたという(家長日記/明月記)。

終りの鏡山は近江の湖東にある。『万葉集』(卷三載)には豊前の同名の山が詠まれていた。近江は、「垂仁紀」に載る新羅王天日槍の日鏡を収蔵した山と伝える。鏡山は、懸詞的な連想による鏡が作意にかかわっている。その点は前述の男山↓男の連想に似るが、『近江輿地志略』(卷之六一)には、「西の方よりこれをみれば、宛も鏡に対するが如し」と記されている。懸詞的連想もさることながら、この場合は形態・機能上の特定の印象として鏡がみいだされた可能性もある。都に比較して近い地の利もあったかもしれない。鏡山↓鏡ということ、影(拾遺73) みがき(同606) 一面影(金葉46) くもるよもなき(同207) くもりなき(新古今751) など、所縁の歌詞が選ばれている。『初学抄』(所名)に、「かゞみ山 ケフゾミルトモ」との記載があるのも、もちろん鏡の想定によるものである。

以上、わずかの例に註解を加えながら、叙景・叙情の両面に地名の表現の実態を述べてみた。『古今集』の地名表現としては、ほぼ右に

尽きているといえる。四季歌では、地名と景物との組み合わせが主になっている。それに較べると、恋歌・雑歌では地名の使用例が多く、また変化にも富み、多彩なものがある。地名そのもの、あるいは地名に他の歌詞が伴って、修辞上のある役割を果している。しかし、地名の認識は両者に径庭があったとはいえない。証となるのは仮名序の地名にふれた行文である。そこには、「富士の煙によそへて人を恋ひ」 「高砂住江の松も相生のやうにおぼえ」など地名関連のものに交って、「松虫の音に友をしのび」「女郎花のひとときをくねるにも」といった一節がみられる。地名だけの表現機能が特殊視されるのではなく、一般の歌詞の場合を含めて、同じ次元で迎えられているのである。基本的にはすべて歌の「ことば」であり、その表現適性がみいだされ、素材としての認識に及んでいるのである。その点で、都鄙遠近の異った地理的条件を負う地名は均質化され、名所へなどころとして歌の世界に収容されたといえる。地名と名所を混用してきた嫌いもあるが、名所は、歌の「ことば」に定着をみた地名の意であり、一般の歌詞と同然に普遍化されたものである。

たしかに、四季歌系には名所の使用は、囑目の場合が多い。それだけに具体感があることは否定できない。しかし、名所は景物との組み合わせによって、一首を構成の端をなしている。それによって、映像の鮮明化という表現効果もたらされるのである。この組み合わせによる握翫が題詠に道をひらき、名所の普及に大いなる便ともなっているといい。端的には、この組み合わせは、名所の場合の専用と

は限らない。形を変れば、立春と霞・梅花と鶯・桜花と風・卯花と郭公・萩と鹿など、歌題と素材との関係・素材相互の關係に同様みるこ
とができる。また修辭上、暗部山↓暗し・守山↓漏るなどの技巧が、
その名所特有の標識として映像化を制約した面は重視されるが、懸詞
的連想そのものは他にも例がすくなくない。松虫↓待つ・女郎花↓を
みな・藤ばかま↓袴など、仮名序にみられるとおりである。これらは
作歌の意図・技法など内外両面との絡みで、『古今集』の表現体系の
一環をなすものにはかならない。その中でとくに名所が興感されたの
は、個々別々の響きや匂いが映像を誘い、視覚的に印象効果への期待
となったからである。四周の日常世界とは異なる別趣の新しさ・珍しさ
が、名所の機能にみられたからである。

その関心が顕著に示されたのが、恋歌・雑歌の場合である。名所は
修辭技巧の面で、著しい効果をもたらしている。懸詞的連想・序・縁
装・譬喩をはじめ、ある観念・印象の表出など、劃期の趣が深い。こ
れらも名所によるほかに例はすくなくないが、元來地名とはかわり
の薄いとみられる叙情歌だけに、意図的・技法的に優れた一面を示し
た。仮名序の指摘が大部をこの叙情系に占められるように、名所の
「ことば」としての認識が最大限に活かされたといえる。流行現象と
もみられる傾向を示したのである。

三

このような傾向の中で注意したいのは、まづは選択された名所の所

在分布である。すでに小町谷照彦氏⁽¹⁾が詳細を明らかにされているが、
私見と相異する点もあるので次に一覽してみたい。

凡例としては次の諸点である。大和・山城など国名は原則として載
せないが、とくに地名が機能している場合（近江（離別369））は加え
た。「片岡の朝の原」「春日なる三笠の山」「菅原や伏見の里」など複
合的な場合は、朝の原・三笠山・伏見の里を採った。石上と布留、神
奈備山と三室山などは一括した。しかし、春日野と春日山、佐保川と
佐保山など同所二様にわたる場合は、それぞれの項目としてある。そ
のほかでは、譬喩的な涙川、普通名詞とみられる五月山・手向山・細
谷川・水無瀬川などは加えていない。詞書にあらわれるものは、対象
外である。

右に従って、以下、畿内七道（延喜式卷三）
所には歌番号を付し、それに・印を加えて「読人しらず」を区別し
た。

（畿内）

大和 朝原（252）

明日香川（341・687・720・933・990）

穴師山（1076）

石上布留（144・679・870・886）

妹背山（828）

春日野（17・19・22・357・478）

春日山（364）

葛城山 (1070)

神奈備森 (253)

神奈備山 (山室) [254
284
296
300
1074]

佐保川 (361)

佐保山 (265
266
267
281)

立田川 (283
284
294
300
302
311
314
629)

立田山 (108
994
995
1002)

平城 (90
986)

初瀬川 (1009)

檜隈川 (1080)

伏見里 (981)

三笠山 (406
1010)

三輪山 (94
780
982)

吉野川 (124
471
492
651
673
699
794
828)

吉野里 (332)

吉野滝 (431)

吉野山 (3
60
317
321
326
363
588
950
951
1005
1049)

山城

栗田 (1105)

板井清水 (1079)

井手 (125)

宇治橋 (689
825
904)

宇治山 (983)

大荒木杜 (892)

大堰川 (1106)

大沢池 (275)

小倉山 (312
439)

小塩山 (871)

男山 (227
889)

音羽川 (山科) [749]

音羽滝 (同) [1003
1109] [664
歌か]

音羽山 (東山) [142]

音羽山 (山科) [256
384
473
664
1002]

笠取山 (261
263)

鹿背山 (408)

霞ノ谷 (846)

亀尾山 (350)

賀茂社 (487
1100)

清滝 (925)

暗部山 (39
195
295
590)

白川 (666
830)

橘ノ小島崎 (121)

常盤山 (148
251
362
495)

鳥羽 (696)

深草野 (832
971)

深草山 (831)

瓶原 (408)

御手洗川 (501)

山ノ井 (404
•764)

淀 (587
•759)

河内

和泉

引野 (702)

〔余材抄による。初学抄不載。八雲御抄因名不載〕

興津浜 (914)

高師浜 (915)

摂津

天ノ川 (418)

須磨 (758)

須磨浦 (962)

住江 (360
559
•778
779
•905
•906
1111)

住吉 (917)

田蓑島 (913
918)

長柄橋 (826
•890
1003
1051)

難波 (604
•696
918)

難波浦 (973
1003)

難波瀉 (913
916
•974)

堀江 (732)

御津 (649
894
•973
•974)

淀川 (721)

(東海)

伊勢 伊勢海 (509
•510
•683
1002
1006)

荇生浦 (1099)

長浜 (1085)

遠江 小夜中山 (594
•1097)

駿河 田子浦 (489)

富士嶺 (680
•1001
1002
1028
/富士山
•534)

甲斐 甲斐嶺 (1097
•1098)

相模 差出磯 (345)

相模 小余綾磯 (874
•1094)

武蔵 武蔵野 (821
•867)

常陸 筑波嶺 (966
•1095
•1096)

(東山)

近江 畝野 (1071)

逢坂 (390
•536
•634
740
•988)

逢坂関 (374
473
•537)

逢坂山 (1004
•1107)

近江 (369)

鏡山 (899
1086)

鳥籠山 (1108)

守山 (250)

水荃岡 (1072)

美濃 関藤川 (1084)

信濃 浅間山 (1050)

姨捨山 (878)

上野 伊香保沼 (1003)

陸奥 安積沼 (677)

安達原 (1079)

阿武隈川 (1087)

小黒崎みつの小島 (1090)

興ノ井 (1104)

塩釜浦 (852) (1097)

信夫 (724)

末松山 (326) (1093)

名取川 (628) (650) (1108)

籬島 (1089)

宮城野 (694) (1091)

都島 (1104)

(出羽) 最上川 (1092)

(北陸)

越前 帰山 (370) (982) (902)

白山 (383) (391) (414) (979) (980) (1003)

越中 有磯海 (818)

(山陰)

但馬 二見浦 (417)

因幡 因幡山 (365)

(山陽)

播磨 明石浦 (409)

高砂 (908) (909) (218は地名に疑義あり)

野中清水 (887)

美作 久米皿山 (1083)

備前 唐琴 (921)

備中 吉備中山 (1082)

(南海)

紀伊 玉津島 (912)

吹上 (272)

淡路 淡路島 (911)

(西海)

豊前 (釜籠カ) かさゆひの島 (1073)

四極山 (1073)

このほかに、巻一〇物名歌には、紙屋川(山城)、交野(河内)、伊

加賀崎・唐崎（近江）、淀川（摂津（上表にあり））唐琴（備前（同））の地名がみえる。本文では懸詞に詠まれているので加えなかったが、地名の意識としては注意される。

この一覧によると、国数で二八、名所数一二五、歌数二四五（「詠人しらず」を含む）である。墨滅歌を合わせた『古今集』の中で、約二二%が名所との関係をもっていることになる。これを畿内七道の区分で一表にしてみると、次のとおりである。

国数	名所数	歌数 <small>（作者未詳）</small>
畿内	5	72 (160)
東海	7	11 (25)
東山	5	26 (38)
北陸	2	3 (9)
山陰	2	2 (0)
山陽	4	6 (7)
南海	2	3 (2)
西海	1	2 (1)

これで見ると、畿内では名所数七二・歌数一六〇（作者未詳七〇）、畿外では名所数五三・歌数八三（作者未詳四七）となっている。名所数では、知名のものが多く畿内のほかにも、広く求められたことがわかる。その点では、歌数の方が対照的である。畿内が畿外の約一・八倍となっている。一名所あたり、畿内二・三首、畿外一・五首である。知名なものに好尚の固定する一面がうかがわれる。また歌数には相応の作者未詳

歌が含まれるが、その占める割合は、畿内四三%・畿外五二%である。畿外には卷二〇の大歌所御歌の関係が加えられるので、かなり率もあがっている。いずれにしても未詳歌が半数近いというのは、記名歌となつて一段と名所への傾斜が深まったことを示している。好尚に高低があり、この傾向はのち固定化の道をたどるがこれと傾斜の深まりとは、表裏の関係をなすものであった。この両面が作用して、次第に名所表現を制約し、視覚的空間の形成を兆すことになるが、さらに右の表示に検討を加えてみたい。

畿内が名所数・歌数ともに多いのは当然とみられるが、注目されるのは、東海・東山・北陸の三道が顕著なことである。山陰・山陽・南海・西海の四道に対して、国数はもとより、名所数で八倍、歌数で六倍に達している。『万葉集』の地名分布とは、明らかに相異している。先進の大陸に門戸を開く国情から前代は瀬戸内を中心に住還も多く、その方面の地名の詠まれる必然性があった。犬養孝氏(2)によると、大約、内海一〇〇・山陰二〇・西海一〇〇といった数字が示されている。北陸二〇・東海（駿河）五〇などの数字に較べれば、その優位は明白である。西高東低であった。「西」に対する「東」は中央支配の形成期にあたり、防人の供給地となり、ことに陸奥は「道の奥」の未開の蛮地であった。前代から征夷の軍旅が屢々起こされ、平安以降版図を拡げるとともに、ある程度政治的安定を加えたが、「西」との比較にはならなかったと思われる。その「東」に、名所の関心は向けられたのである。これは名所の性格を暗示するものであり、のちの新たな

のの創出について、伝統を培う基礎となったといっている。

次は国ごとに、顕著なものを表示してみたい。

名所数	歌数(作者未詳歌)
大和	24 73 (33/47%)
山城	32 53 (22/41%)
摂津	13 31 (14/43%)
近江	9 17 (9/52%)
陸奥	13 18 (12/70%)
越前	2 9 (0)

名所数で山城、歌数では大和が筆頭である。一名所あたりの平均歌数でも、大和が多い。吉野山一首・吉野川八首・立田川八首・明日香川五首・春日野五首などが含まれるからである。作者未詳が四七%を占めるのは、地縁によるとみられるが、記名歌の場合にも、前代の代表的な名所を承けて、万葉大和への好尚が示されているようである。

山城は帝都があり、歌人の直接、各地を探訪できる機縁も大きい。それだけに名所が分散して、一ヶ所あたりの歌数がすくなくなっている。生活の周辺にみいだされる名所は、素材として好適である。その身近さが、のちにはいっそう新たな関心と呼ぶことになるが、古今集はすでにその前兆を示しているようである。山城では、旅次にかかわる音羽山(東山山科)六首、機智に適する暗部山四首が目立つ程度である。作者未詳は、ややすくなくなつて、時代の推移がうかがわれる。

次に摂津は、淀川の水運の赴くところであり、都にはない海湾をひかえている。官の港があり、海景の勝覧に恵まれ、住吉社・四天王寺など社寺のゆかりもある。難波関係八首・住江七首に示されるように、名所は一部の地に集注し、ことに水(海)との所縁によるものが多い。前代を承けて、この時代にも通交の要衝としての関心が深かつたとみられる。叙情系に多く用いられたのが目に立つ。

近江は逢坂関によって、山城と国界を接している。東山道に属したが、近江古京・唐崎修祓・石山詣などによって、都人との関係は深かつた。天智天皇創建の崇福寺詣、また先帝追慕による桓武天皇の梵釈寺詣に因む「志賀の山越」の一道も、東山を越えて湖岸に達している。不思議にその淡海や長等山への関心がみられないが、逢坂関係一首はこの国をもっとも印象づけるものである。東路を扼して、その往還に都との紐帯を常に意識される名所であった。「逢ふ」の懸詞的な連想は、修辞上に限らず、離別・羈旅・恋など、内面に響くものがあつたと思われる。叙情系を本命としつつも、やがて駒迎との関係も加わつて、両系に多彩な展開をみせた。

陸奥は、『古今集』で脚光をあびた。前代にも若干はみられるが、この僻遠の地が名所一三を数えたのは驚異である。前代の故知に倣つた『古今集』の「東歌」は、頭初に陸奥歌七首を載せている。その位置といい、歌数といい、続く相模歌以下とは格段の相異である。都の関心を端的に示している。源融の河原院作庭・信夫もぢ摺りを先駆とする陸奥への傾倒は、浪漫的な憧憬に近い。『伊勢物語』の漂泊に

も、それがあらわれている。この雲煙のかなたへの心情が、多くの名所に託されたのである。前述の名所にみられる「東」への関心を、象徴するものといっている。未知なる世界を具現する方途として、陸奥の名所はもっともふさわしい存在であった。名所の観念性という一面が、よくあらわれている。万葉陸奥が磐城・岩代に限られたのに対して、陸前を中心としているのはやはり時勢の反映である。未詳歌が多いのは、風俗にもとづく大歌の占める割合が大きいからである。

終りの越前は帰山・白山の二ヶ所ながら、歌数は九首と多い。すべて記名歌であることも注意される。前者に「帰る」の連想があり、後者は「白山の名は雪」(巖内414)とみる山貌の魅惑が大きい。ともに越路を代弁するような存在として、前代と同じように都人に響いてくるものがあつたと思われる。

このほか、個々に言及すべき点はあるが、富士嶺(山)の一例だけをあげておきたい。五首という歌数も注意されるが、仮名序指摘の一首(恋入しらす534)以下、すべて燃ゆる火に恋情を通わせる趣向となつている点である。前代の崇高・神秘・壮大を主題とする超然とした存在感が、すっかり影を潜めている。根本は、やはり自然観の相異にある。擬人の技巧が常用される時代の風化しているのである。怪異・嶮岨・荒涼などの要素が濫化され、優美で調和のとれた装飾的なものとして、自然は結像している。日常卑近な、山紫水明の平安京の自然の相貌によるところが大きかった。ここにも名所起用の有力な条件の、すでに熟していたことが知られるのである。

ついで、四季歌と恋歌・雑歌と二分野の対照で、名所の分布・歌数を明らかにしてみたい。同一の名所が四季と恋・雑にわたる場合は、それぞれに算えた。また同一の名所が恋歌と雑歌に用いられる場合は、一ヶ所として採った。いずれの場合も、名所数の算出は、その名所による歌数の多寡とは関係のないものとしてある。表示すると、次のようになっている。

四季歌		恋歌・雑歌	
名所数	歌数(作者未詳)	名所数	歌数(作者未詳)
(巖内) 大和	14	(巖内) 大和	25 (15)
山城	10	山城	20 (11)
(巖内) 近江	1	(巖内) 近江	1
陸奥	1	陸奥	1
紀伊	1	紀伊	1
和泉	2	和泉	2
河内	1	河内	1 (1)
摂津	11	摂津	21 (14)
(巖内) 伊勢	1	(巖内) 伊勢	3 (2)

遠江	1	1	(1)
駿河	2	3	(2)
相模	1	1	
武蔵	1	2	(2)
常陸	1	1	
近江	3	7	(5)
信濃	1	1	(1)
陸奥	4	5	(2)
越前	2	3	
越中	1	1	
播磨	2	3	(2)
備前	1	1	
紀伊	1	1	(1)
淡路	1	1	(1)

叙景系・叙情系の対照は、きわめて鮮明である。四季歌では、畿内の大和・山城に限られた感がある。大和は名所数・歌数とも最多である。朝原・明日香川・石上布留・春日野・神奈備杜・神奈備山・佐保山・立田川・立田山・平城古京・三輪山・吉野川・吉野里・吉野山が詠まれている。「読人しらず」が約半数、あとは当代の作歌である。傍線の名所は、貫之・友則・深養父・是則による実情がみられる。続く山城は、井手・大沢池・小倉山・笠取山・橋の小島崎・男山・音羽山(東山)・暗部山・常盤山である。傍線は実情で、貫之・友則・今道によ

るものである。しかし、題詠の方が歌数は多く、「読人しらず」のすくないことと合わせて、さすがに当代、王城の地にふさわしい文雅の一面をみせている。

畿外は極端にすくなく、三首とも当代である。近江は守山(貫之)で実情、紀伊は吹上(道真)で『寛平菊合』の歌である。陸奥の末松山(興風)は、陸奥歌を本歌とする。情の名所を景に仕立てたのが出色で、高く評価されている。名所の将来を占う一首といえるのである。

名所による叙景的関心は畿内、それも二国にとどまり、ほかは全く圏外にあった。名所の表現機能への着目が何にあったかは、次の恋歌雑歌と比較してみると、一目瞭然の趣がある。右の表示を集計してみると、次のようになる。

叙景系	国数	名所数	歌数(作者未詳)
畿内	5	39	69 (41/59%)
畿外	15	23	34 (19/55%)
叙情系	5	27	48 (18/37%)

叙情系が断然優勢である。国数で四倍、名所数・歌数で二倍余となつている。その内訳では畿内が畿外にまさり当然ともいえるが、畿外に視野を拡げている点に大きな特色がある。それに未詳歌の比率の高いことで、半数を超えている。はやく「読人しらず」に、先鞭をつけられた事情の反映とみていい。

次に、この叙情系を恋歌・雑歌に分けて、一表を示してみたい。

	名所数	歌数(作者未詳)
恋歌		
大和	7	13(7)
山城	10	12(6)
河内	1	1(1)
摂津	6	10(8)
伊勢	1	3(3)
遠江	1	1
駿河	2	3(2)
武蔵	1	1(1)
近江	2	5(3)
陸奥	4	5(3)
越中	1	1(1)
雑歌		
大和	7	11(8)
山城	7	7(3)
和泉	2	2
摂津	9	11(6)
相模	1	1
武蔵	2	2(2)
常陸	1	1(1)

近江	2	2(2)
信濃	1	1(1)
越前	2	3
播磨	2	3(2)
備前	1	1
紀伊	1	1(1)
淡路	1	1(1)

前者と恋歌・雑歌の合算した名所数が相異なるのは、重出があるからである。再び集計してみると、次のようになる。

	国数	名所数	歌数(作者未詳)
恋歌	11	36	55(35/63%)
雑歌	14	39	47(27/57%)

両者は伯仲しているようである。未詳歌の比率は恋歌の方が高くなっている。

次に両者の名所を国ごとに具体的に示してみたい。

大和	恋	明日香川	石上布留	妹背山	立田川	三輪山	吉野川
	雑	明日香川	石上布留	立田山	平城	伏見里	三輪山
		野山					吉
山城	恋	宇治橋	音羽川	音羽山(山科)	賀茂社	暗部山	白川

常盤山 鳥羽 御手洗川 淀

雜 宇治橋 宇治山 大荒木杜 小塩山 男山 清滝 深草野

河内(恋) 引野

和泉(雜) 興津浜 高師浜

摂津

恋 須磨 住江 難波 堀江 御津 淀川

雜 須磨 住江 住吉 田蓑島 長柄橋 難波 難波浦 難波

瀧 御津

伊勢(恋) 伊勢海

遠江(恋) 佐夜中山

駿河(恋) 富士山(嶺) 田子浦

相模(雜) 小余綾磯

武蔵(恋・雜) 武蔵野

常陸(雜) 筑波嶺

近江

恋 逢坂 逢坂関

雜 逢坂 鏡山

信濃(雜) 姨捨山

陸奥(恋) 安積沼 信夫 名取川 宮城野

越前(雜) 婦山 白山

越中(恋) 有磯海

播磨(雜) 高砂 野中清水

備前(雜) 唐琴

紀伊(雜) 玉津島

淡路(雜) 淡路島

恋歌・雑歌の重複は、大和四・山城一・摂津四・武蔵一・近江一
で、全体からみると意外にすくない。名所の選択は安易に行われたの
ではなく、作歌に充分に機能するような配慮があったといえる。概し
ていえば、恋歌には、懸詞的連想・序・縁装などに向いているものが
多いようである。一方の雑歌では、譬喩・観念・印象などの託される
ものが多いようである。創意をかけた名所の表現は、とくにこの恋歌
・雑歌に遺憾なく発揮されたのである。

『古今集』の世界は、「ことば」の表現機能の自覚によって築かれ
た。名所は、その「ことば」のもっとも先端的な位置を占めた。大和
・摂津など前代の故地を承けてはいるが、上述の個々の名所は、大部
分が新たにみいだされたものである。そこに時代の好尚に基づく多彩
な技法が投入され、おのずからこの撰集の特色ある一面を示した。名
所の選択は、その表現効果と俟って、歴史的展開の基点として評価さ
れるのである。

注(1) 「三代集の名所歌枕」(常葉学園短期大学紀要第一集)

(2) 『万葉の旅』上中下(社会思想社刊)